

忠義の一族「吉弘氏」について

佐藤浩一

吉弘氏は大友田原氏の庶流であり、鎌倉時代から大友氏に仕えていた武士の一族である。大友初代の大友能直（よしなお）の子・泰広（やすひろ）が田原氏の祖となつた。その曾孫である貞広（さだひろ）の弟「田原正賢（まさたか）」が南北朝時代に武功を立て、武藏郷に貰つた領地の「吉広」にちなんで「吉弘正賢（法名は正堅・せいげん）」と名持つたことが始まりである（最終貞に吉弘氏の略系図を添付）。

吉弘川（武藏川支流）の上流には勇壮な「吉弘楽」を行つてゐる樂庭（がくにわ）八幡宮がある。正賢が戦勝と五穀豊穣を祈願したのが始まりと言われている。また、正賢は吉広城を築き、その山麓に永泰寺を建立した（開山には、悟庵禪師を招いた）。永泰寺は吉弘氏の菩提寺となり、今も吉弘氏累代の位牌が祀られている。

戦国時代の親信（ちかのぶ）の代に、都甲（とこう）地域に本拠を遷したと言われている。重臣として大友家を支え続けた忠義の一族である、都甲に入部した吉弘氏は、屋山の麓に筧城（かけいじょう）を築き平時の居館とし、有事の際は屋山城を詰城にしていた。

吉弘氏は大友家の忠臣として、誉れ高い一族である。吉弘氏直（うじなお）は、天文三年（一五三四）の勢場ヶ原（せいばがはる）の戦いで大内軍の猛攻により全身に矢を受け、壯絶な最期を遂げた。

吉弘鑑理（あきただ）は、立花道雪（戸次鑑連）・白杵鑑速とともに大友家の「三老」と言われ、その生涯のほとんどを合戦に費やした。鑑理の子供である鎮信（しげのぶ）・鎮理（しげただ・後の高橋紹運）、さらには孫の統幸（むねゆき）が大友家に忠義を尽くして、いざれも壯絶な最期を遂げている。また、関ヶ原の戦いで西軍につき改易されるが、旧領の柳川を与えられた立花宗茂（たちばなむねしげ）は吉弘鎮理（高橋紹運）の子供である。

吉弘家当主として有名な人物は、吉弘鑑理・鎮信・統幸の直系の三代である。人物の詳細は次のとおりである。

【吉弘鑑理（よしひろあきただ・あきまさ）

？～亀二年（一五七二）？

豊州三老と称される吉弘鑑理は、国東郡屋山城主として大友宗麟の申次職（もうしつぎしょく）をつとめ、弘治三年（一五五七）十一月から元亀二年（一五七一）頃まで宗麟の加判衆として活躍する。玖珠郡・肥前国の「方分」にも抜擢されている。大友家重臣としての吉弘家の礎を築いた人物である。生涯のほとんどを合戦に費やしており、肥後・豊前の各地を転戦した。

永禄十二年（一五六九）には、筑前多々良浜の戦いでは吉川元春・小早川隆景率いる毛利軍を破っている。その後、毛利軍は中國地方の情勢悪化もあり九州北部から撤退した。大きな戦功を立てた鑑理は元亀二年（一五七一）頃、病死したと伝えられている。

赤神諒氏の小説「大友二階崩れ」では、吉弘鑑理が主人公である。

大友家二十代当主・大友義鑑の後継者争いの内紛。二十一代当主・大友義鎮（宗麟）派とその弟塙市丸派の間に起つた事件に忠義で苦惱する吉弘鑑理を描いている。この小説には副主人公として、実在の確証はないが、鑑理の弟として鑑広（あきひろ）と言う人物を登場させている。

鑑理の父氏直は若くして（一説には十九歳）戦死したので、鑑理にはいたとしても極少数の兄弟姉妹しかいなかつたと推測できる。

吉弘家は、四百年以上前に滅んだ大友家の家臣のため残つている資料が少ないので実情である。鑑理には、弟がいたという説もあることである。大分県宇佐風土記の丘歴史資料館発行の「豊後国都甲莊1」の大友吉弘氏系図（抄出）には、鑑理の兄弟として「右馬頭」という人物が記されている。鑑理の弟が実在したか否か、解明されることを期待したい。

鑑理の活躍は大友義鎮（宗麟）の時代になつてからが顕著である。重臣として登用されており、二階崩れの変は不明な部分も多々あり資料では確認されていないが、鑑理が大友義鎮（宗麟）側に深く関与していたのではと推測している。

【吉弘統幸（よしひろむねゆき）】
永禄六年（一五六三）～慶長五年（一六〇〇）】

吉弘統幸は主君への忠義と石垣原合戦での奮戦が現在も称えられている戦国武将である。天正六年（一五七八）、大友氏と島津氏は九州の覇権をかけて「耳川の戦い」で激突した。この戦いで大友氏は惨敗し、統幸の父・吉弘鎮信も討ち死にした。

統幸は大友家を支えるため、若干十五歳で吉弘家の家督を相続した。耳川の戦いで敗戦により不安定となつた大友領内の守りを固めるため、任された屋山城の整備を行つた。その後、数多くの合戦で武功を重ねた。槍の名手として知られ、朝鮮出兵の際には、豊臣秀吉から「皆朱の槍」を賜つたと伝えられるほどの戦いぶりであった。

【吉弘鎮信（よしひろしげのぶ）】

天文十三年（一五四四）～天文六年（一五七八）】

に尽くした。一五七八年、大友軍と島津軍が日向で激突した耳川の戦いにおいて討ち死にした。金宗院に墓、長安寺に供養塔が建つてある。

毛利軍と戦つた門司城の戦いなどで戦功をあげた。長安寺の別当を努め、天念寺の大般若經を再興するなど、六郷満山寺院の興隆

その後、主君・大友義統が朝鮮出兵での不手際から豊臣秀吉の怒りに触れ改易となつたため、統幸は都甲の領地を失つた。しかし、武将としての能力を買われ、中津の黒田官兵衛に招かれた。この時期に、関係を深めた黒田家臣・井上九郎右衛門には恩義を感じてい

たと言われている。井上九郎右衛門は、後に石垣原の戦いでの一騎打ちの相手武将である。その後は、柳川の領主で従兄弟の立花宗茂に二千石の待遇で仕えた。

豊臣秀吉が亡くなり、天下は秀吉の子・秀頼を立てる西軍と徳川家康を中心とする東軍に二分され、幽閉されていた大友義統は解放された。庇護されていた西軍の総大将・毛利輝元に豊後一国

を拝領する条件で西軍につく約束をすることとなつた。慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の戦いが起こると立花家は西軍につくことを表明した。統幸は大友家の当主・大友義乗が徳川家に仕えていたため、大友家の旧恩に酬いるため立花家に暇を願い出て義乗の元へ向かつた。その道中で、大友家の再興を願う前当主・大友義統と出会う。義乗のこともあり、義統に東軍につくことを進言するが、聞き入れられなかつた。統幸は東軍につく方が有利であると考えていたが、忠義から義統に従い西軍につくことにしたと伝えられている。

かつての主君・大友義統に従つて別府の石垣原で黒田官兵衛・細川忠興軍と激戦を繰り広げたが、次第に劣勢となり、かつての主君・義統に別れを告げ、残りの手勢三十余騎で突撃、七つ石で旧知の黒田家臣・井上九郎右衛門との一騎打ちの末、壮絶な最期を遂げたと言われている。旧知の井上九郎右衛門に功を挙げるため、又、部下の命を救うため自刃して討たれたとも伝えられている。忠義を重んじた生き方は、敵味方問わず称えられ、細川家は戦場の傍らの石殿を建て、黒田家の記録には「眞の武士」と紹介されるほどであった。統幸は、石垣原の戦い前夜に「明日は誰が草の屍や照らすらん

石垣原の今日の月影」という辞世を残している。

吉弘統幸の墓と伝わるものは、豊後高田市の「金宗院跡」と別府市の「吉弘神社」に立つてゐる。また、位牌は、別府市の「臨濟宗・太平山宝泉寺」に祀られている。

【金宗院（きんそういん）跡・豊後高田市 松行】

金宗院は禅寺で永享八年（一四三六）の開基と言われ、大友氏の重臣で屋山城主であつた吉弘氏の菩提寺として栄えた。

吉弘統幸は、石垣原の戦いで壮絶な最期を遂げたが、当時の金宗院住職が、ひそかに統幸の首級を持ち帰り、寺内に葬り弔つたと伝えられている。統幸の墓は、統幸が弔われたその地に立つてゐる。また、その隣ある国東塔は、統幸の父である吉弘鎮信のものとされている。

現在、寺は無住となり、寺屋は崩壊し、金宗院の名前が残るのみになつてゐたが、吉弘氏の子孫や地区の住民により供養塔が建てられ、金宗院跡として遺されている。なお、統幸の墓は盜難に遭い、現在は復元したものが祀られている。

【吉弘神社（よしひろじんじや）・別府市 石垣西】

吉弘統幸を祀る神社である。統幸は石垣原の戦いで壮絶な最期を遂げた。その統幸を近くの宝泉寺の住職が村人と相談したうえで、

石碑を建てて手厚く葬り、一株の松を墓の側に植え、位牌を寺に安置して、その菩提を弔つていた。大正十一年（一九二二）、地域の人々

の手により、墓所の前に一間社流造（いっけんやしろりゅうづくり）の本殿と入母屋造裳階（もこし）付の拝殿が建立され、吉弘神社と名付けられた。神社裏の森林中にある墓地に、高さ一八五センチメートルの板碑型の墓碑がある。これは吉弘統幸の墓と言われている。

吉弘統幸公への敬慕を詠んでいる。

▲参考文献・参考資料▼

- ・ 豊後国都甲莊1（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）
- ・ 伝たい！ 豊後高田の先人たち（豊後高田市教育委員会）
- ・ 吉弘統幸（大分県豊後高田市）・大友二階崩れ（赤神諒著）
- ・ 豊後高田の城跡（ぶんごたかだ文化財ライブラリーVO1）
- ・ 豊後大友物語（大分合同新聞社）・吉弘神社由緒
- ・ 大分歴史事典（大分放送）・戦国九州三国志（学習研究社）
- ・ ウィキペディア

【臨濟宗 太平山 宝泉寺（ほうせんじ）・別府市 石垣西】
吉弘統幸の位牌を祀る寺である。石垣原の戦いで壮絶な最期を遂げた統幸を当時の住職が村人と相談のうえで、手厚く葬つた。位牌は当寺へ祀り、菩提を弔つてている。

戒名「統雲院殿傑勝勝運英大居士」

「寶泉寺縁起」に、「此墓側に下馬松あり」との記述がある。

下馬の松は宝泉寺の僧が統幸公の屍を葬つた際、その忠烈を後に伝えんが為に、その墓側に一株の松を植えた。年を経るに従いその松は枝を垂れ、往来の人は皆馬を下り礼拝したと伝えられている。当初の松は枯れてしまい、現在のものは後に植えた松である。

江戸時代の儒学者・貝原益軒は筑前黒田家に仕え「黒田家譜」を編した。その中で吉弘統幸公を礼讃し「吉弘が如き眞の武士は古今類いなき事なり」と絶賛している。

豊後の三賢人と言われる三浦梅園も「石垣原夜雨」という漢詩で

＜吉弘氏の略系図＞

